

## 出版報告

### 『モダニズムの越境Ⅱ 権力/記憶』

(人文書院, 2004年9月15日刊)

村田 宏

本書は、2002年2月に刊行された『モダニズムの越境』(人文書院)全三冊(I越境する想像力, II権力/記憶, III表象からの越境)の分冊版である。今回は、「限定800部, 分売不可」というかたちをとっていたが、今回、各巻を独立した書籍として出版する運びとなった。

筆者は、「フェルナン・レジェと『赤い30年代』」(pp.72-100)において、ファシズムと共産主義が鋭く対立した、いわゆる「赤い30年代」の人民戦線成立期のフランスの美術と政治のかかわりを、画家フェルナン・レジェを事例として考察した。具体的には、ソヴィエト国家に対する、ほとんど過剰なまでの夢と憧憬が、さながら熱病のように広まった「30年代」の時代様相をたどりなおし、ついで、1937年パリ万国博覧会に展示された《力の伝達》が、レジェがソ連への期待と共鳴を盛りこんだ作品であった可能性を、画家の親ソ的な人的交渉のありようを視野に収めつつ論じた。分冊版刊行にあたって、前著の内容を一部修正している。

村田を除いた共同執筆者は、つぎのとおりである(執筆順, 敬称略)。

大平具彦(北海道大学言語文化学部教授), 石川達夫(神戸大学国際文化学部教授), 安藤哲行(摂南大学国際言語文化学部教授), 鈴木将久(明治大学政治経済学部専任講師), 坂田幸子(慶應義塾大学文学部助教授), 亀山郁夫(東京外国語大学外国語学部教授), 米川良夫(國學院大学文学部教授), 三宅昭良(東京都立大学人文学部助教授), 田中純(東京大学大学院助教授), 西中村浩(東京大学大学院総合文化研究科教授), 大石紀一郎(東京大学大学院総合文化研究科助教授), 和田忠彦(東京外国語大学外国語学部教授)。